

階段状のサニタリー空間

杉浦英一
EIICHI SUGIURA



写真：Nacása & Partners Inc. 鳥村銅一

スパイラルウォールの家

設計：杉浦英一建築設計事務所



上—北西面全景
左—ライトコートから浴室、洗面室、トイレを見下ろす
下—トイレ



□周辺環境、与条件など

「スパイラルウォールの家」は、東京郊外に立地する、夫婦2人のための住まいである。周辺は環境の良い住宅地で、今回の条件であった“ホームシアターのある住まい”を実現するにあたっては、近隣への影響などに多分に配慮する必要性があり、結果として地下に設置することとなった。また、互いに職業を持つカップルの住まいとして、あまり日常生活感覚にとらわれない“居心地の良い場所”をつくることがテーマとなった。

□全体の構成

この住宅は、1枚の壁を立体的なスパイラル形態に組み上げた基本形が、空間の骨格になっている。これにより、単調な表現になりがちな3層のマッシブな重層構成に変化を持たせ、形態に動きとそれぞれの階の連続性を持たせることを意図した。

地下（第1層）：ホームシアターである。防音性を高め、音と映像を存分に楽しむことができる“精神の解放空間”となることを意図した。天井の高さは音響効果に配慮して4mとし、内装はチーク材で統一している。また、音響のコンサルティングは石井伸一郎氏に協力いただいている。

1階（第2層）：エントランスホール、

並びにそれに続く夫婦のためのプライベートスペースである。また、エントランスホールから2階に上る階段は、吹抜けの透明感を強調するために、素材として強化ガラスを用いている。

2階（第3層）：外部との連続性を意図的に遮断した地下とは対照的な、外部に対しての開放性が高いリビングスペースである。キャンティレバーで突き出した部分にはキッチンを設けており、その下部は駐車場として利用している。

階段状のサニタリー空間：1階と2階のスパイラルウォールをつなぐ、斜めに上昇していく部分をサニタリー空間としている。空に向かっていく上昇感を持たせながらも、同時に外部からの視線がプロテクトされるような構成を持たせた。また、階段状のスペースの突き当たりには螺旋階段があり、更に上部の屋上空間へとつながっている。また、衛生器具などの構成要素は、極力形態を主張しないシンプルなものを使用した。

サニタリー空間は通常、平面的なプランニングとされる場合が多い。ただし、今回の計画では、この部分を“家の中の別荘”のような、“生活の意識を切り替えるスペース”としての性格を与えるために、あえて非日常性を持たせるべく、立体的なスペースとしている。

□素材

この建物は、コンクリート、石、タイル、鉄、ガラス、木などで構成されている。仕上げを決める段階では、それぞれの素材を、極力生成りで、すなわちあまり素材を表層的に使用するのはなく、素材が最もその素材らしく表現できる状態で使用することを重視した。例えば階段などの鉄部も、塗装仕上げではなく、あえて溶融亜鉛メッキリン酸処理仕上げとし、鉄が本来持つ“力”を表現することを意図している。*

すぎうら・えいいち—建築家／1957年生まれ。1981年、東京芸術大学美術学部建築科卒業。1983年、同大学大学院修了。1983～93年、内井昭蔵建築設計事務所。1993年、杉浦英一建築設計事務所設立。
主な作品：前橋の家（1999）、ライフパートナーこぶし（2000）、森田記念館（CSP記念館、研修所）（2002）など。

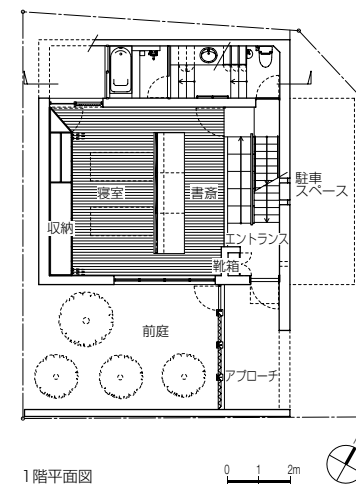
■建築概要

名称：スパイラルウォールの家
所在地：東京都国分寺市
家族構成：夫婦
敷地面積：132.26㎡
建築面積：64.96㎡
延床面積：100.05㎡
規模：地下1階、地上2階
構造：RC造
工期：2003.9～2004.12
設計：杉浦英一建築設計事務所
施工：平成建設

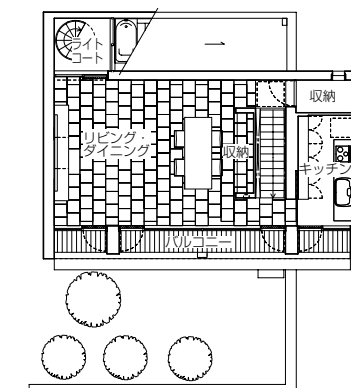
●INAX使用商品●床タイル：アースストーン ESS-400S/412、エレガントマーブル ピアノカララ ESSM-400P/11、便器：サティス D-118AS/BW1*、トイレ手洗：GL-C33DHC/BW1
※は一部仕様が変わり、品番を変更しています。



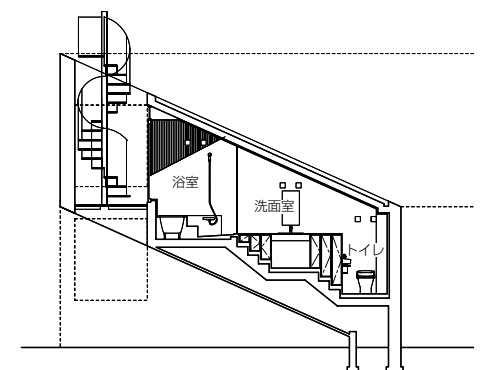
左—2階リビング・ダイニング
右—エントランスからガラスの階段を見る。
突き当たりは水まわり入口



1階平面図



2階平面図



水まわり断面図